

## 植物随想

## シラネアオイ

笹川通博

昔話や伝説に、よくこんな話があります。ある村人が知らないうちに、山の中に迷い込んでしまう。すると目の前に見たこともないような立派な屋敷が現われる。なかに入ってみると、確かに人の気配はするのにも、誰もいない。何だか恐ろしくなって、あわてて村へ引き返す。その屋敷から、どんなものでも持って変えると、それがその人に富をもたらす、というのです。あるいは、そんな屋敷ではなくて、美しい花園であったり、におやかな女性であったりもするのです。そのことをあとで他の人に話してみても、誰も信じてくれず、自分自身も、他の誰も、もう二度とそこへは行けないのです。そういうことに出合う者は、男でも女でも、大抵はどうやら、少しばかり頭が鈍いようなのです。それで、そんな異境に紛れ込んだりもするのでしょうか、話しても信じてもらえないのでしょうか。しかしまた、異境を信じようとしない人たちよりも、確かに心は清いのです。

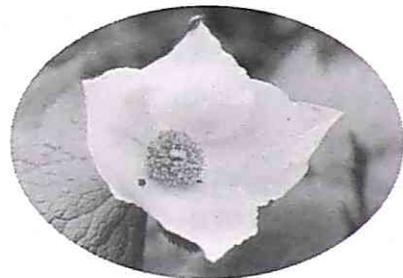
わたくしも植物を探しに、よく山に入ります。迷っているのかいないのか、やぶをかきわけたり、木の枝をくぐったりします。植物を探しているようなつもりでいて、何やらいつのまにか、異境の屋敷や花園を、探しているような気分になってくるのです。しかし、ついぞそんな異境は現われたためしがなく、やぶはいつまでも人気のない森なのです。それで、自分の心の貧しさや卑しさを少し悲しんだり、そんなことで一憂している自分に呆れたりもするのです。

異境というのがあるとしたら、それはこの世のものではないわけですから、どこに忽然と現われても、不思議ではないのです。いつもお菓子を買っているお店の裏側や、せんべいぶとんが収まっている押し入れの中に、あるいは、自分のすぐ耳元に、異境へと通じる目には見えない穴があいていても、よいのです。もし、そんな異境が現われて、自分の願いをかなえてくれるとしたら、一体、何を願ひしましょうか。しかし、おのを池に落とした男のおとぎ話のように、いろいろ考えてみても、結局、元のままを望むでしょう。決して偽善ではなくて、あるいは、ご機嫌取りでもなくて、よく考えれば考えるほど、本当にそう思うのです。

今の時代は、もう、お金さえ出せば、大抵のものなら手に入ります。もっと便利にすることもできます。自動車、電話、テレビなどなど。もうなしではいられないほど、いろいろなものが普及しました。わたくしたちの欲望を上回るほど、便利になってきました。最近の新聞に、夏でも滑れ

る屋内スキー場、というのが載っていました。もういいよ、もういい、と言いたいのです。これ以上便利になって、一体、どうするのでしょうか。便利なテレビは、目をおおいたくなるほどひどい番組を平気で流しています。便利な車を、耳をふさぎたくないような音をたてて乗り回し、一体何人を殺したのでしょうか。

文明を否定するわけではありません。大切なのは、その使い方だと思うのです。つまり、「心」の問題なのです。近頃よく言われている「心の時代」とは、そういうことだと、わたくしは考えています。文明は、生命を直接操作できるまでに発達しました。これから先もなお、発達するでしょう。さて、それを一体どうやって使うか、が問題なのです。文明は道具です。道具ばかりが発達しても、問題が解決するわけではありません。文明が発達すれば危機が回避できる、と考えることは誤りです。使い方を誤れば、かえって不幸を招きます。わたくしたちに必要なのは、その使い方、心の在り方なのです。



西頸城郡黒姫山 1981. 6. 7

人もめったに訪れない奥深い山を、案内されて登ったことがあります。きつい登りでしたが、落ち着いた気分で、森を渡って行くことができました。下る途中に、小さな池がありました。夏だというのに、まだ雪が残り、白くけむっておりました。その池のまわりを、たくさんの淡い紫の花が咲き乱れていたのです。氷河時代からの生き残りといわれ、日本にしかないシラネアオイなのです。これぞ、異境の花園ではないでしょうか。花々の中で思わず、立ち止まり、座り込み、天を仰いで寝ころびました。無上の幸せです。このような所がまだ残っているなんて、信じられないほどです。いえ、他の誰からも信じてもらえなくてもよいのです。ここは、もう、異境なのです。しかし、花をよくみようと顔を近づけると、小さな虫がたくさん、その中で群れていることに気づきました。ふっと、我に返りました。花はなぜ美しいの、虫はなぜ集うの、鳥はなぜ歌うの。みんな、生きているのだ、と。心の清さも、これもまた、異境のものかも知れません。